手術室看護師へのKYTを用いた医療安全教育
～医療安全に対する意識の変化～

キーワード：手術看護　医療安全　KYT

手術部
郷田純子　岡田礼子　原田三津子　原美里　山﨑伸子　藤田喜美惠

Ⅰ．はじめに

2011年4月～2012年3月に手術室看護師が起こしたインシデントのうち68.6%が手術室勤務 1～3 年目の看護師によるものであった。種類別ではガーゼ・器械などのカウントミス、手術器械の滅菌業務、チューブドレーン管理に関するインシデントが多かった。また、月別のインシデント発生件数を見ると、5～7月に多発していることが分かった。

現在、手術部での医療安全教育は入職時に手術部安全マニュアルに沿って行うオリエンテーションと、実際に業務を行いながら指導者が説明・指導を行うという教育体制である。インシデント発生後はすみやかに看護師長、リスクマネージャーに報告し、インシデントレポートの提出を行っている。その後、インシデントレポートの分析・共有化を行ったのち対策に沿ってマニュアルの整備、業務改善、学習会における教育的介入などを行っている。しかし、依然として同様のインシデントが発生しており、根本的な問題解決につながっていない。

小黒は「事故やミスが起こりやすいポイントは他者から教わることができるが、それはただ与えられたものに注意を払っているにすぎない。自分で考えて事故の元になりうる危険因子に気付けるような『リスク感性』を磨かせる教育が必要」[1)]と指摘している。

手術部でも一人ひとりのリスクアセスメント能力を向上させ「リスク感性」を高める教育が必要であると考えた。そこで危険への感受性を磨く訓練として効果的と言われている、危険予知トレーニング（以下KYTとする）を医療安全の一環として行った。KYTを行ったことにより、看護師の医療安全に対する意識に変化が見られたので報告する。

Ⅱ．目的

リスクアセスメント能力、危険を察知する「リスク感性」を高めるためにKYTを行い、手術室看護師の医療安全に対する意識の変化を明らかにする。

Ⅲ．方法

1．研究期間

2012年9月15日～10月19日

2．研究対象

手術室勤務1～3年目の看護師14名

3．方法

1）2011 年度のインシデントレポートの分析結果を基に、発生頻度の高かった「器械カウント」、「ガーゼカウント」に関するKYTシートと、本研究開始当時針刺し切創が続いていたことから、「危険物取扱い」に関するKYTシートを加えた計3枚を作成した。

2) 1～3 年目の看護師 14 名を経験年数が偏らないように 4～5 人ずつの 3 グループに分けた。KJ 法を活用した KYT 基礎 4 ラウンド法で各グループ 2 シートを用い、トレーニングを実施した。

3) KYT 実施前後で独自に作成したアンケートを用いて調査を行い、分析・評価を行った。

Ⅳ．倫理的配慮

アンケートは無記名とし、個人が特定できないようにした。また、研究への参加は自由意志とし、不参加の場合でも不利益を被らない旨を口頭および文書を用いて対象者に説明し同意を得た。

Ⅴ．結果・考察

アンケート回収率は前・後ともに 100%であった。

①KYT の必要性

トレーニング実施前は、「看護師は常に危険を予測して行動することが必要と思うか」に対し、そう思う 14%、非常にそう思う 86%であった。(図 1)

トレーニング実施後、「KYT は学びとなり、今後の業務に生かすことができるか」に対し、そう思う 43%、非常にそう思う 57%であった。(図 2)

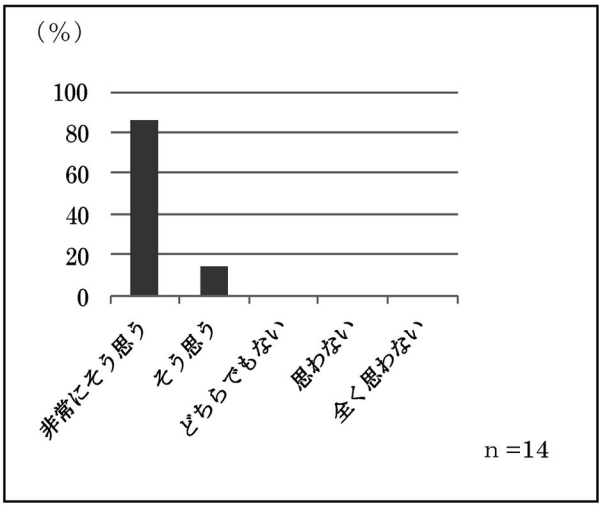

図 1.「看護師は常に危険を予測して行動する事が必要と思うか」

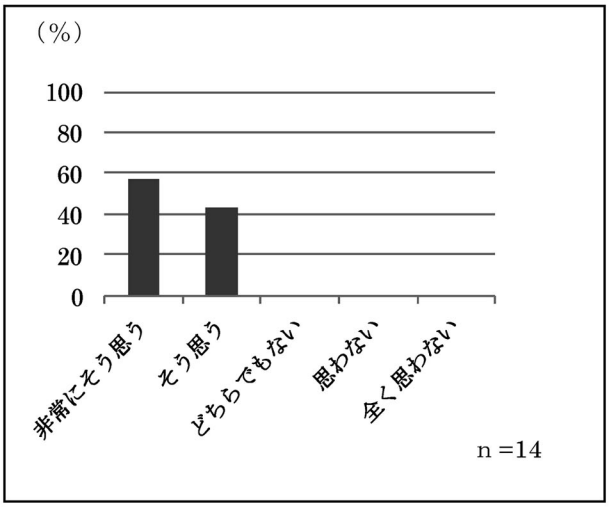

図 2.「KYT は学びとなり、今後の業務に活かすことができるか」

手術看護は他の臨床実習に比べ実習時間が非常に少なく、就職後初めて経験することが多くある。また、特殊性が高く事前に指導を受けていても、手術室での経験の浅い看護師は潜在する危険を察知できず、適正な回避行動が取りづらい状況にあると考える。

トレーニング実施後、「もっと早く KYT を行っていれば良かった」「受け身の講義と違い、達成感があった」「先輩と行うことで、新たな危険に気づけた」など、KYT は今後の業務に活用できると解答していた。杉山は「KYT では、KYT シートを通して、その現場にいなくても、実際にその現場に居合わせた自分が危険に気づき予防措置を考えることができるという疑似体験を行うこともできます。」[2] と述べている。よって KYT は複雑で危険が

多く潜んでいる医療現場で、新人がカルチャーショックに陥らないための事前トレーニングとしても、非常に有益であると考える。

②医療安全に対する意識の変化

トレーニング実施後、「意識が高まったと思うか」に対し、そう思う 29%、非常にそう思う 71%であった。(図 3) また、「KYT に参加し、自分の行動に変化があったか」に対し、行動に変化があった 93%、変化がなかった 7%であった。(図 4)

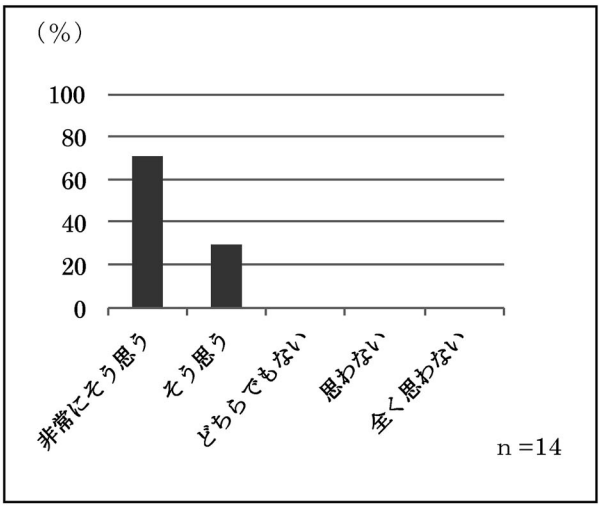

図 3.「KYT 後、医療安全に対する意識が高まったと思うか」

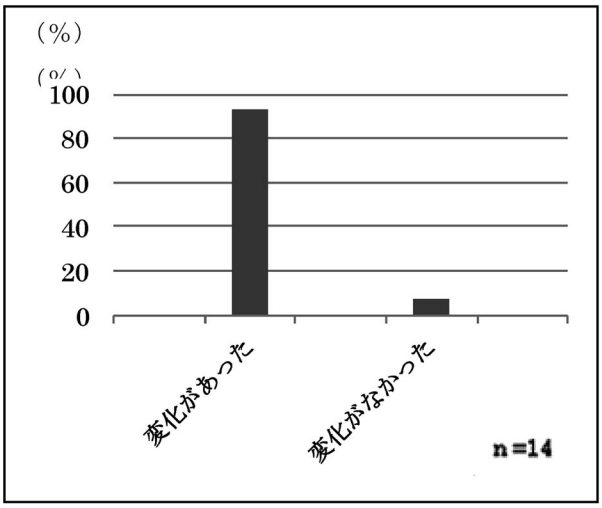

図 4.「KYT に参加し、自分の行動に変化があったか」

「危険なポイントが把握できたので、注意が向くようになった」「急いでいても、メスや針を安全に管理するようになった」などの自由記載からも、トレーニング実施後の自分の意識や行動に変化があったと感じていたことが分かった。また、「今までの自分の行動を振り返る事ができた」「普段何気なく行っている場面から、問題点が見えた」など、今まで実施してきた手術看護やマニュアルに意味づけがあることをスタッフ自らが気づき、リスク回避の動機づけができたのではないかと考える。医療の現場には、「いつも同じでないこと」「前もってプログラムできないこと」が数多くある。それぞれの場面で注意すべきことを理解し、柔軟に対処できるのは「人」の強みでもある。このトレーニングを行うことは、予測できそうな危険要素について事前に分析し、柔軟に対処する力を身につけることができる重要な役割があると考える。

また、自由記載から「KYT を定期的に行った方が良い」「新人だけでなく業務に慣れてきた頃にやった方がいい」など、今後も KYT を継続的に実施したほうが良いとの意見が見られた。杉山は、「KYT を繰り返し行う効果は、事例ごとの危険因子や対策を学ぶというよりも、多くの危険が潜んでいることに、自分自身が気づくようになることである。」[3] と述べている。KYT を行えば事故が減るというような安易な期待を持ってはいけないが、継続的に KYT を実施することは、あらゆる場面でも自らが危険を察知し、予防策を立て、インシデントが発生した際も素早く対応できるなど、安全な回避行動が取れるようになると考える。今回のトレーニングで対象者全員が、医療安全に対する意識が高まったと感じてい

た。スタッフの意識を高め、持続していくためには、KYT を継続的に行っていくこが重要である。

③KYT の評価

「KYT シートの事例は適切であったか」に対し、そう思う 43%、非常にそう思う 57%であった。(図 5)「KYT に参加して意見が言えたか」に対し、言えた 93%、言えなかった 7%であった。(図 6)

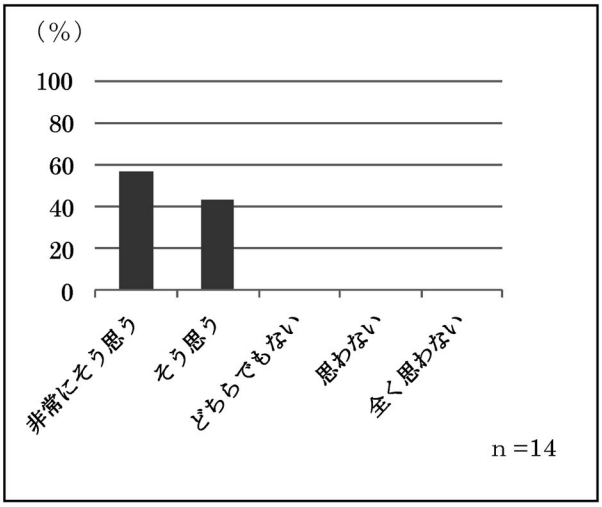

図 5.「KYT シートの事例は適切であったか」

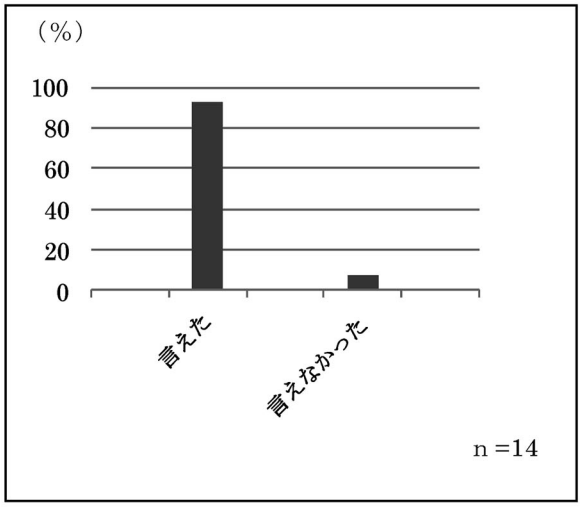

図 6.「KYT に参加して意見が言えたか」

KYT に参加して意見が言えなかった理由として、「経験したことのない場面であったため、シートを見ても危険因子が思いつかなかった」との意見があった。危険因子に気づけない場合は、トレーニングの進行役が、危険因子に気付けるようスタッフを誘導していくことが重要であるが、全員が参加できるトレーニングにするためには、個々のスタッフの学習レディネスを把握し、適切なシートを選択することが重要である。また、今後は、インシデントが多発傾向にある時期にトレーニングを開催するなど、より効果的なトレーニングとなるよう再度検討していく必要がある。

今回は、1～3 年目の看護師を対象に行ったが、手術部全体の安全性を高めるためには、スタッフ全員で事故防止に取り組む必要がある。看護師全員で KYT に取り組むためには、短時間で有効にトレーニングが行えるような運用をして、手術部全体で安全文化の確立を目指したいと考える。

Ⅵ. 結論

1) 1～3 年目の看護師に KYT を行ったことで、医療安全に対する意識が高まり、その後の行動に変化があったと感じているスタッフが多かった。
2) 今後は医療安全教育の一環として KYT を導入する。また、KYT を継続し行うことで、インシデント内容の変化、および手術看護の質の向上に効果があるかを分析・評価していく必要がある。

＜引用文献＞

1) 小黒厚子：医療安全推進者ネットワーク　医療安全を取り巻く動向・ここに注目 http://www.medsafe.net/contents/recent/86yokohamasakae.html,2012/03/13.

2) 杉山良子：ナースのための危険予知トレーニングテキスト,メディカ出版,27,2012.

3) 前掲 2),10.

＜参考文献＞

・藤原由紀恵：手術部における新卒看護師への KYT,主任＆中堅,（2006 年版特別編集号）,34-53,2006.

・佐藤成美：手術部での看護に関連したインシデント報告の検討,秋田大学医学部保健学科紀要,12（2）,152-157,2004.

・志摩久美子：KYT を活用した現場でのリスク教育,実践手術看護,14（2）,11-22,2010.

・中野幸子：小児看護の臨地実習で行う危険予知訓練の効果，大阪信愛女学院短期大学紀要,44,1-11,2010.